



絵と文・菅野 明

50

麻生区
文化協
会報

曹洞宗高石山

法雲寺

法雲寺は室町時代に創建されたと推定されています。

五反田川を経て高石の谷戸から千代ヶ丘方面に登って行くと表門が見えてきます。参道には桜の大木が並んでいます。競って枝を張り重なり合って、二月の光を浴びていました。本堂の色調と相俟ってよい景色です。

二月十五日は法雲寺の涅槃会法要でした。そして、昭和六十年に川崎市重要歴史記念物に指定されている木造阿弥陀如来座像の御開帳がありました。

阿弥陀如来座像は平安時代後期につくられたもので、市内の仏像の中では藤原様式（定朝様式とも呼ばれている）を最もよく示しているもののひとつといわれています。市が境内に立てました案内板にも、丸いお顔明るく穏やかな表情や柔らかな衣文などにその作風の特徴が見られると書いてありましたが、得心して観ることができました。

涅槃会法要の雰囲気の中で参拝する機会を得たことが法雲寺の阿弥陀如来座像をいっそう魅力ある仏像として印象を深くしました。

参考文献 高橋嘉彦著『ふるさと川崎の自然と歴史』

『これからの麻生区の文化・芸術のまちづくり』私の想い

麻生区長 磯野利男



麻生区長として2年の月日が過ぎようとしています。これまで2005年から副区長として2年間、その後市民局市民文化室長として文化行政に2年間携わり、中でも文化・芸術のまちづくりを進めている麻生区との縁は深くその後、区長として就任させていただきま

す。麻生区では皆様と「文化・芸術のまちづくり」を進めています。麻生区には以前から多くの文人が訪れ、いまでも多くの芸術家の方が住んでおられますが、多摩区からの分区以降、この豊かな土壌のもと地元のみなさんの力で麻生音楽祭、KAWASAKIしんゆり映画祭など多彩な芸術活動を盛り上げていただいております。

2007年春には昭和音楽大学が移転開校し、また秋には川崎市アートセンターが開館し、これらの地域資源と地元のみなさんのネットワークを活用した麻生区ならではの文化・芸術のまちづくりが一層進みつつあります。今回で4回目の開催となった冬のイルミネーションイベント「kiraara @アートしんゆり」や新年の「あさお古風七草粥の会」、春の「アルテリッカしんゆり」なども季節の風物詩としてすっかり定着してま

が結集されやすく、まさに、文化・芸術が持つエネルギーや創造力を最大限に活用したものといえるのではないのでしょうか。

現在、麻生区の人口は16万9千人を超え、今年度も1万人以上の方が転入し、一方9千人近くの方が転出するという大変活発な人口動態を見せています。

開発が行われ都市化が進む中でも、それぞれの地域では祭囃子や踊りなどの伝統・民俗芸能や伝統行事も地域のみなさんの手で大切に受け継がれています。

こうした伝統の継承や啓発を区としてもお手伝いさせていただき、新しく区民になられた方も麻生区を自分のふるさととして実感していただければ、これに勝る喜びはございません。

古くからの伝統文化、そして新しく生まれた文化に包まれた麻生区ですが、さらにアートの日常化と申しますか、街中で気軽に、より身近に文化・芸術を感じられたならば、なお素晴らしいことだと思います。活力と魅力あふれるまちづくりに向けて、麻生区文化協会の皆様のますますの充実した活動を期待するものです。

ながらえて 今日

成富 満

一九八九年一月七日昭和天皇が亡くなり、六十四年の昭和は終わった。翌八日、年号は平成と改まった。

が来るなんて……あの当時十五歳であったミハイロフは、読経のテープがまわるなか、わたしの顔を見つめて絶句した。

得しは何失いしは何六十四年の

昭和は終わる夜の雨音

恒例の東京緑園会（新京陸軍経理学校十期生の同期会）が、その年も七月一日上野「寿」で開催された。席上たまたま一人がつぶやいた「行けるものなら、もう一度シベリアに行ってみたい」とのひと言が、「駄目で元々、やってみるか」になった。

それが実現したのは、折からのソ連のペレストロイカのお蔭であった。準備一年、わたしたちは一九九〇年（平成二年）七月、ソ連邦（現ロシア）アムール州ノヴォアレクサンドロフカ村ジムスキー・ソフォーズ（国営農場）に収容所跡を訪ね、墓参を果した。「まさか四十五年も経って、日本人

白樺の白木に書ける鎮魂の

文字にじませて手向け酒垂る

——シベリアの捕虜であった日のあとを訪れ、祖国に帰ることなく死んだ兵の友らの霊を慰めようとするのか。酒に文字のにじむ新しい墓標の背後に、広茫と大地の起伏が抱いて来た記憶のまま広がる。そして四十五年の歳月が悲しみを隔てる——（朝日歌壇 共通二十年秀歌選 近藤好美氏選評）

鎮魂の旅

健やかなれば再び立てりひたひたと

我が足浸すアムールの水

虹立ちしアムールの涯見て帰る
トイポリ（白楊）の小径 風はもう秋

再びは訪う日ならんアムールの
涯に没る日を胸熱く見る

かく易く我に涙の出るものか友の
ハモニカ「故郷」吹き初む

シベリアの光集めて流れ行く

アムール河は悲を運ぶ河

盆燈籠 験の裏に ともしけり

お盆になると不思議に思い出す句である。昭和二十一年夏、シベリアのラーゲリ（強制収容所）で作ったものであるが、苛酷な冬を生き延びて、やっと人心地がついたとき、何となく同好の士が集まり、句会のようなものができていた。何人いたのか、誰とだれだったのか、会には名前もあつたようだが、いまはそれらはまったく記憶にない。それなのに、なぜかこの句だけは覚えていて、夏が来ると、お盆になると、きまつて思い出すのである。

多くの戦友がラーゲリで死んだ。だがこの句は彼らの死を悼む心情よりも、祖国日本への望

郷の想いが作らせた句であつたようである。

経理部幹部候補生として教育中敗戦、ソ連軍に降伏、シベリアに連行され、二年九ヶ月間抑留を強いられた。その間多くの好運に助けられた結果、私は無事帰国できた。しかもその後、半世紀以上もの平穏な日々には恵まれていた。ながらえて今日思うことは、あの抑留の日々は何だったのか、戦争さえなければ、私たちは抑留されなかつたし、シベリアの地に多くの日本人を埋めてくることもなかつたのである。



第一回シベリア墓参 1990年7月18日

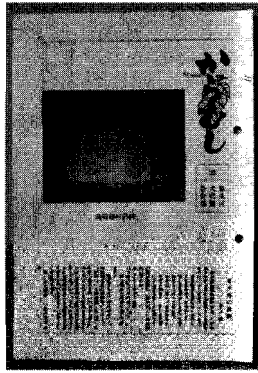
会報「からむし」五十号の歩み

千坂 隆 男

麻生区文化協会の会報「からむし」が今回五十号になった。昭和五十九年十一月十日、麻生区文化協会の誕生より二年間の助走の後、昭和六十一年十一月十日創刊号を発行し、続けて三月、二号を発行して年二回の形を整えた。



会報名の「からむし」はイラクサ科の多年草で、茎を蒸して皮をはぎ麻布の原料となることから「からむし」の名が付いた。万葉の昔よりこの地に多く自生し、「多麻河伯余 左良須豆久利 佐良左良余 奈仁曾許能児乃 己許太可奈之伎」と歌にも詠われ、「多摩」



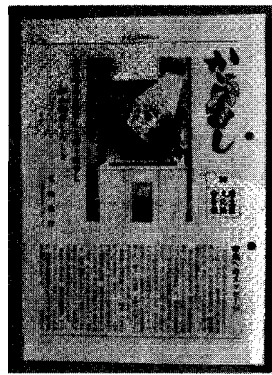
会報の役割は、文化協会と委員のコミュニケーションの場であり、会の活動の記録である。さらに市民への文化協会からの働きかけである。平成二十二年三月号は九百部印刷され、七部が麻生区文化協会以外に配布されている。区役所・市民館・文化財団の二十一ホール等に置いたものが十日も立たずになくなり再配布する状態は、係の者としてはうれしい悲鳴である。表紙は会報の顔であり読み手を引きつけるキーである。手にとってページを開いて貰うためには、それなりの工夫と内容が必要である。

平成二年度から表紙に神社仏閣の石造物の写真を掲載し、平成五年度からは、麻生区内の句碑・詩歌の碑の写真と解説が掲載されるようになった。ここに名実共に麻生区の顔が会報の表紙を飾るようになった。



平成十一年、麻生区文化協会創立十五周年を記念して「からむし」二十七号に新百合ヶ丘南口の彫像「ふるさとの詩」山下恒夫作品の写真と解説を掲載した。麻生区内には「芸術の町麻生」に相応しい前衛から裸婦まで数多くの作品が展示されている。作者の作品に懸ける思いを調べ解説として掲載する

ことは、麻生の街の芸術に関する感性を掘り起こすことにもなった。写真を撮り続けて感じたことは、川崎在住の彫刻家人間国宝圓鋳勝二とその子息圓鋳元規の作品が多いことである。



なお、三十二号からは彫像の写真と共に「川崎地名百人一首」より我が麻生に関わりのある短歌とその作者の氏名を掲載している。四十号から麻生区にある神社仏閣を取り上げることにした。



写真では決まり切った味気のない物になるので、現役会員にお願

いしスケッチと解説を書いて貰った。絵の書き手が自ら解説やコメントを書くことによって、臨場感や寺社への愛着が深くなり、プロからアマチュアまでそれぞれに素朴でユニークな表紙ができたと思賛している。

麻生区には三十二の神社仏閣がある。大方はそれぞれに時を経た風格のある寺社である。



開発事業の完成を記念し、先祖の慰霊と山川草木の供養のため、五重塔を建立した細山地区。



なかには、寺社や地域の特色あ

る伝統行事まで描き込んだ作品もある。麻生区文化協会の個性は會員の個性の集結でもある。

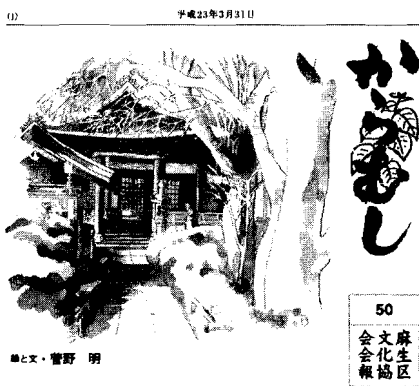


「からむし」の二頁は、新聞で言う「社説」である。このページは麻生区文化協会の顧問・会長・副会長が受け持ち、協会としての主張・論説・決意を述べている。

麻生区文化協会会報「からむし」のもう一つの特徴は、見開き四ページ五ページにある。

わたしたちの街「あさお」の発展に尽くした方を取り上げ、二ページに亘って功績を讃えようとするものである。行く行くは「麻生人物風土記」として纏めることができらばと思っている。著名人であつてもただ麻生区に住んでいるだけでは対象とはならない。政治・経済・文化の面で麻生のために働いたというのが基本である。二十三号 中村正義さんの思い出

- 二十四号 鎌倉を共に歩いて 山田土筆
- 二十五号 自然を愛する写真家 安永能美
- 立川幸夫 千坂隆男
- 三十一号 慈愛の実践家 千坂隆男
- 岡本重辰 千坂隆男
- 三十二号 寺子屋から近代教育へ 小島一也
- 三十三号 農村に芽生え育った近代工業 細王舎 千坂隆男
- 三十四号 柿生に教育の根を 杉本長治
- 白井義胤 杉本長治
- 三十五号 民俗学ひとすじ 箕輪敏行
- 白井緑郎先生 里山観察から昆虫図鑑まで 中山周平 中山 茂
- 三十七号 高石俳句村と笠原湖舟 千坂隆男
- 三十八号 最後の村長飯塚重信 松田洋子
- 三十九号 教育家小塚光治の思想と実践 千坂隆男
- 四十号 郷土を切り開いた 中島周策 京 利幸
- 四十一号 加藤一雄さんと素適な仲間達 瀬川純子
- 四十二号 はいくの日生まれ 笠原古畦 馬場身江子
- 四十三号 子どもと本をこよなく



- 愛した 渋谷益左右 伊藤 始
- 四十四号 郷土を愛した相談役 鈴木太郎 佐藤英行
- 四十五号 私財を投げ打って郷土に尽くした土方達 千坂隆男
- 四十六号 邂逅 画家安喰虎雄 山本絢子
- 四十七号 学究・実践の徒 水上馨 杉本長治
- 四十八号 ゆりがおか児童合唱団を育てた 山田榮子 父母の会
- 四十九号 郷土の開発に尽くした 白井金治郎 岩田輝夫

参考文献

麻生区文化協会創立十・二十・二十五周年記念誌広報部

平成二十二年(十月二十四日)

第二十二回 麻生区文化協会俳句大会

実行委員長
白井爽風

川崎市長賞

大花野天地一つになりにけり

麻生区 清水 幸子

川崎市議会議長賞

蜘蛛の鳴きととのふ夕景色

町田市 谷 文香

川崎市教育委員会賞

農を継ぐ跡目なき納屋ちろろ鳴く

麻生区 箕輪 玉兆

川崎市麻生区長賞

来し方は語らず鬼灯採んでをり

麻生区 藤坂志げこ

川崎市麻生市民館館長賞

乗り合わす嬰のほ、笑み敬老日

麻生区 堀内よし彦

川崎市総合文化団体連絡会理事長賞

秋茄子や嫁と呼ばれし日も遠く

麻生区 藤田 風樹

川崎市俳句連盟理事長賞

忌に帰るのみの故郷鉦叩

所沢市 佐藤 登季

川崎市観光協会連合会会長賞

一番に妻の乗る馬盆支度

麻生区 本玉 秀夫

麻生観光協会会長賞

子のクレヨンぐいぐい描く兜虫

麻生区 松野 茂

麻生区文化協会会長賞

新涼のきびきび動く手足かな

麻生区 入江佐登子

平成二十二年俳句大会当日俳句

席題「走」色「当季雑詠に読込み

龍胆の色より暮るる峽の里 白井 克恵

白もまた燃ゆる色なり曼珠沙華 羽根田 明

秋の虹すこし未練の色残し 池内 英夫

式部の実色を極めて挽みをり 早川 靖子

落武者の色してあたりやれはちす 潮 仲人

人生をゆつくり走り暮るの秋 川嶋 正子

山峽の紅葉映して水走る 高松たまたき

新走飲んで気弱を払いけり 近藤 久生

みちのくの雨に色濃き林檎かな 本玉 秀夫

あかね色落暉に映ゆる禪寺丸 市川 草人

平成二十二年俳句講座開催

八月二十四日

講師 山崎せつ子(麦の会副幹事)

演題 「歩き遍路」

九月七日

講師 梶原美邦(青芝副主宰)

演題 「語源を識つて俳句を愉しむ」

九月十五日

講師 市川草人(桃の花俳壇会員)

玉川桃林会幹事、ささなみ同人

演題 「郷土の農詩人を追って」

第八回 あさお古風七草粥の会 ユニセフ募金に多数の来場者が協力

恒例のあさお古風七草粥の会が
一月七日、区役所前広場において、
文化協会主催の区協働事業として
開催されました。

風は冷たいものの好天に恵まれ
て十一時の開会より半時間も前か
ら行列ができ、一〇分ほど早く開
場しました。予定した八〇〇食は、
十二時過ぎに配食し終えました。

粥は、古沢で採集した春の七草、
地元産の米、大根を使って前日か
ら女性陣を中心に会員が五時間か
けて仕込み、当日は早朝から市民
館で調理作業。早野聖地公園里山
ボランティアから提供を受けた木
炭・竹炭を使って、お餅を焼き大
鍋のお粥に供給する男性陣、テン
ト下で、粥をよそい配膳するかっ
ぼう着の女性陣も大わらわ、てん
てこ舞いの忙しさでした。昨年か
ら、それまでの使い捨て食器に代
えてリユースの食器を利用するこ
とで、環境への配慮もしています。
この事業は、麻生区との協働事業
として三十二万円の助成を受けてい
るので来場者から粥の代金をいただ

くことをしませんが、「ただで粥を
食べるのはどうもしっくりこない」
という方々も多く、昨年までも区役
所敷地内の七草畑の維持費のために
募金を行っていましたが、今年には、
さらに、世界の飢えた子どもたちへ
の援助になればと、ユニセフ募金を
呼びかけたところ、おかげさまで、
三四、五〇五円の募金が集まり、ユ
ニセフに寄付することができまし
た。

会場では、わらべ唄の合唱、お
正月の遊び指導、笠原秋水氏によ
る揮毫なども行われ、区民の皆様
に楽しいひとときを提供すること
ができました。(文 佐藤勝昭)



雑学教室(アカデミー部主催) 麻生区の津久井道を歩く

吉田 功

二三年十一月二七日読売ランド
駅にこの企画に興味のある方々が
集結した。千坂隆男講師・山田土
筆講師が見えられたので参加者の
確認と講師紹介し出発することと
した。

今日の行程である読売ランド駅
から柿生駅までの約七kmの「津久
井往還を歩く」の資料を手渡す。

さあ、出発だ、の掛け声で動き
だす。まず最初に読売ランド駅の
跨線橋に登り、駅に沿ってある津
久井道を確認し茅葺の旧家を眺め
る。

津久井往還は江戸と多摩の農村
を結ぶ道として栄えた道である。

百合丘駅に向かい歩道橋とガソ
リンスタンドがあり、「細王舎創業
の碑」がある。明治二二年川崎最
古の近代地元工場である。

この碑の横を行くと読売ランド
遊園地に向い「二枚橋」がある。
伝承によると源頼朝の平家追討
ちの拳兵を聞き奥州から駆けつけ
た弟義経がこの橋を渡るとき弁慶
が橋の上に丸太を並べ土盛り補強
した。横から見ると丁度橋が二枚

重なっているように見えたことか
らこの名がついたといわれている。

「弘法の松」

柿生音頭に「弘法の松は天下の
眺め九十九谷と多摩の丘」と唄わ
れた弘法大師伝説のある丘。失火
のため現在には孫の木。

ここで周りを眺めながら昼食。
三々五々弘法大師伝説を読みな
がらリラックスしていると中島豪

一講師が持参して来た約三十年前
の航空写真(一m四方)を見せて
もらった。変貌した町並み見て如
何に開発されてきたかが理解でき
た。

ここから最終目的地「柿生駅」
に向かう、途中

「山口集落の入り口の石碑」

四つの石碑でもっとも古いのは、
庚申塔で享保十一年(一七二六)
で、そのほかに馬頭観音・地神
塔・馬持中がありました。古び
ていてよくわかりませんでした。

「柿生駅前付近」

ここで、講師鈴木有さんと合流す
る。

柿生という地名は明治二二年

『アメリカ珍行記 人との出会い』

講演会

半世紀前のアメリカの社会はど
うだったのか? 麻生文化祭事業と
して、十一月七日大会議室で講演
会が催されました。講師は元サラ

市町村制の実施に伴い都筑郡の十
ヶ村は一つの村になった。村名を
決めるに世に知られた甘柿「禅寺
丸」の産地として「柿生村」を選
んだとしている。津久井往還に
「絹」の運搬が始まり、上麻生の
「竹の花」に宿屋(二八三年)が
出来た。物資の輸送によって人の
動きに合わせて道幅が広がり、
真直ぐになったり又迂回したりす
ることによって、その歴史が刻ま
れ変化することになる。

自分の住んでいる地域の歴史を
道路から知ることが出来るしい一
日であった。



リーマンで麻生在住の加藤俊二氏。
ジェット機のない時代にフルブ
ライト留学生として氷川丸でアメ
リカに渡った時の珍しい体験談や
人との出会い、人種問題などアメ
リカ社会の現状がユーモアを交え
て語られました。参加者一八〇人。
麻生区のみならず、東京やその周
辺からも集まり、熱心に聞き入り
会場が和やかな笑いに包ままし
た。以下は参加者の感想文の一部。
「人との出会いの大切さ、面白さを
楽しく拝聴。」「国境を越えた人との
出会いは未来に繋がる大切なも
の、第二話を聞かせてほしい。」
(文 文化サロン部長 加藤孝子)

会員の活躍

※本玉秀夫

叙勲 瑞宝双光章

元日本電信電話公社における業績による。

※中山 茂

受賞 川崎市社会功労賞

禅寺丸柿の保存、特産品開発に貢献されたことによる。

アルテリッパ新ゆり美術展

「二月二十八日～三月六日」

今年も第三回アルテリッパ新ゆり美術展が開催され、一七〇〇余名の参観者をもって終了した。初日は佐藤忠男日本映画大学長をはじめ多数の来賓を迎えて盛大にオープニングパーティが開催された。

麻生区美術家協会の洋画・日本画。工芸。麻生区文化協会美術工芸部の書・いけ花・写真・陶芸。「舞台衣装をつけた民藝の女優を描くデッサン会」作品展。特別企画として、民藝の俳優・女優の描いた作品も展示され、来場者から「他に類を見ない魅力溢れる美術展！」と絶賛された。芸術のまちに相応しい文化活動を期待に込められるよう今後も取り組んで行きたい。(橋本 周)

異色の画家

佐藤勝昭の個展を訪ねて

私が油絵に接するようになったのは縁あって、岸田劉生、安井曾太郎、小磯良平、野間仁根、中川一政、向井潤吉、石川磁彦、野口彌太郎らの画伯の作品を見るようになってからである。海外の画家については、プラド・ルーブル・エルミタージュ等の美術館の見学からである。

文化協会の役員会の総務、かつ、工博で東京農工大学の名誉教授(応用物理学専攻)という異色の経歴をもつ洋画家ということ、佐藤勝昭氏のスケッチ展と油絵の作品展を訪ねた。

二二年八月二三日～二九日、ギヤラリー・ジョイアンドグレース(湯島)でのスケッチ展。開展四日目にいったが、作品の七割近くがすでに売却済みになっていた。パリとパリ近郊のスケッチ二六点。

私は、パリは四回も訪れているので一つ一つが懐かしく、時間のたつのを忘れて鑑賞した。工学者であり、応用物理学者である正確さをもちつつ、自由奔

放に描かれた筆の運びがあり、よいスケッチ展であった。

スケッチから本画へと移って行く創造の推移を識りたいと、一月一八日～二三日銀座ひさギヤラリーに佐藤勝昭(油絵)・小野隆彦(写真)の二人展を早々に訪ねた。

久々に『いい油彩』を鑑賞した。パリ・ストックホルム・コペンハーゲン・イスタンブール・バクー・ヤルタで描いたスケッチに基づくもので、絵具の扱いのよさによって、見る者は、強い印象を受ける。特に白絵具のとりながよく、パリ・北欧・中東に想いをはせた。パリ郊外の絵は、光と影を見事に描き上げ、傑出していた。

(畔田二郎)



サンマルタン運河 (パリ) 100号

編集後記

▼留学中の若者の夢や希望が断たれたニュージールランド地震！その無念さ、鎮魂の思いが……。そんな折、突然襲った三月十一日の東日本大地震に人々は恐怖で奈落の底に。津波が家屋を人を歴史や財産全てを一瞬にして押し流し飲み込み街は跡形もない。さらに、福島原発事故。刻々と報じられる自然の威力、人間の無力さ。こうして筆を執っていることにさえ後ろめたさを感じつつ、被災者への支援や力になるために立ち上がることを決意し筆を置く。(橋本 周)

関森田鶴子・岩田輝夫・畔田二郎
千坂隆男・橋本周・佐藤勝昭

麻生区文化協会会報
からむし 第五十号
平成二十三年三月三十一日発行
発行人 麻生区文化協会
会長 菅原敬子
編集 麻生区文化協会
広報部
川崎市麻生区万福寺一―五―二
麻生文化センター内
☎ 〇四四―九五―一―三〇〇
印刷 マイタウン21